

報 告

同朋大学社会福祉学部 2020 年度大学教育改革推進事業

中部圏教育改革ネットワーク

(旧 産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業)

～ 2020 年度の実践報告 ～

目 黒 達 哉

はじめに

平成 24 年 9 月 20 日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の 25 大学で応募したところ選定された。選定されたことは、長年培って来た本学社会福祉学部の社会福祉教育が高く評価されたと思われる。なお、平成 26 年度でもってこの事業は無事に終了した。しかし、この取り組みの重要性和大学の首脳部のご尽力により、平成 27 年度からは、引き続き大学の自己資金で運営されることになった。現在は、社会福祉学部の教育活動の一環として定着してきている。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力（12 の能力要素）から構成されている。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が 2006（平成 18）年から提唱している。この社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現して

いる。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生きる力」の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神の社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

なお、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部の事業は中止せざるを得ないような状況であった。学生らに満足のいくような充実した事業を展開できず、今後コロナ禍でのこの事業の在り方について課題が残る一年であった。

． 事業の概要と目的

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努めている。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらすことができる。本取組の目的は、産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成ことである。そこで、本学部の学生が社会的・職業的に自立し、産業

界のニーズに対応した人材となるための大きな柱は、１．アクティブラーニングを活用した教育力の強化、および２．地域・産業界との連携力の強化である [(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入、(2)産学連携授業の実施、(3)地域の産業界と連携した実践的なインターンシップ] である。

具体的には次のようになる。

１．アクティブラーニングを活用した教育力の強化

学生が社会人基礎力を身に着けるために、初期段階としては、初年次教育の基礎ゼミ等でマインドマップや KJ 法の手法を学び、またグループワークを実施し実践的な学びを展開した。

２．地域・産業界との連携力の強化

(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

社会福祉現場の OB・OG との連携による現状理解とニーズ把握
「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」

保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」

キッズカレッジ実技講習会

介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）

産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」

(2) 産学連携授業の実施

社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

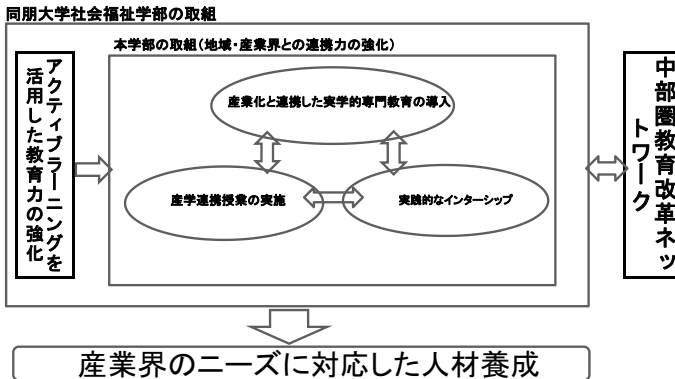
キャリア支援講座 ・ 、 ボランティア活動、 傾聴活動論、
その他（実務家を招聘する科目）

(3) 地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO 法人、NGO 団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターンシップに質的な変更を行う。

インターンシップ . . .

以上のような(1)～(3)の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。さらに、地域の・産業界との連携強化を推進し、その成果を検証するために、グループ内の分科会やグループ全体の産学協働連携協議会において本学の取り組みの成功体験、失敗体験を報告する。また、他大学の取り組みを共有し合う中で共通理解をし、さらなるチャレンジに向けて取り組みの質の向上を図る。



なお、平成 27 年度以降、大学で経費を予算化し継続している。

． 各事業の報告

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、＜地域・産業界との連携力の強化＞の中で、一部の取り組みのみ実施された。実施された取り組みについて、下記のように報告する。

1. 「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉関係従事者の集い」

目 的

学生、教員、OB・OG がともに、現代社会における福祉的課題について共に考え、共に学び、交流を深める場とする。

内 容

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、残念ながら、同朋大学社会福祉関係従事者の集いは中止した。2020 年 11 月 11 日 14 時 40 分から 16 時 10 分まで、成徳館 12 階ホールにて、代表学生と教員の少人数で、同朋大学社会福祉学会の総会のみを実施した。

成 果

代表学生は、総会の企画・運営によって福祉実践力を高めることができた。また、コロナ禍でどのようなことが私たちに求められているのかを考えることできた。

2. 「実践力を高めるキッズカレッジ～学内実施型子育て支援活動～」

目 的

本学社会福祉学科子ども学専攻では、演習科目に位置付けられている学内型子育て支援事業「キッズカレッジ」を実施しており、豊かな感性やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、学び続ける意欲など精神面の強い学生を育てることを目的としている。

内 容・実 績

キッズカレッジは子ども学専攻にとって、実際に親子と触れ合いながら、授業で得た知識・技能を実践し、学を深める大切な場である。

しかし、2020 年度は新型コロナウイルス感染症流行拡大防止のため、前期はキャンセル、後期は遠隔での実施に変更になった。

後期のキッズカレッジは、「てのりの」アプリを利用したインターネット上の動画配信型のものとなった。1 年ゼミと 3 年ゼミによる親子でできる手遊び、お菓子作り、ペープサイトの実演など保育実技の動画と、教員によるミニ講座など合計 22 本の動画を配信した。

成 果

直接のやりとりはできなかったが、「親子」にみてもらうことを意識した活動を行うことができた。学生は、授業で得た知識・技能を実践し、学びを深めることができた。

3. 「精神障害者サポートプロジェクト」

目 的

地域に暮らす精神障害者が日頃利用できる場所として、精神科病院のデイケアや地域活動支援センター、就労継続支援施設などの障害福祉施設や事業所が存在する。それらは、「精神科医療機関を受診していること、精神障害者保健福祉手帳をもっていること」などの条件で利用登録し活用するものであるが、そのような制度などに縛られず、精神障害者がふらっと立ち寄れるような場所の提供を目指すのが、このプロジェクトの目的である。

内 容・実 績

2020 年度後期、学生たちはアルコール依存症をはじめとする各種依存症について調べ、学んだ。しかし「当事者のことは当事者に聞いてみなければわからない」というゼミのモットーのもと、名古屋市内にある NPO

法人愛知県断酒連合会「仲間の会あゆみ」の当事者のお話を聴くことができた。その方法は zoom ミーティングで実施した。

成 果

お互いに慣れないオンラインでのやり取りであったが、学生は当事者の話からアルコール依存症は病気であると再認識し、また仲間や家族の存在の大切さを感じた。

これまでのサポートプロジェクトは当事者に直接会って感じ取り、学んできたが、今年度の取り組みを終え、オンラインでもお互いの交流の可能性があることを実感した。

3. 「ボランティア活動」

目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

具体的には、ボランティア活動は『事前学習・準備 実践（活動）
事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付けることである。いずれも実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の中で実施した。

内 容・実 績

2021 年 11 月 14 日（土）13 時～16 時、名古屋市中村土木事務所のご協力により、学生 15 名が環境美化ボランティア活動を実施した。実施内容は、大学近くの稲葉地公園の落ち葉拾いであった。

コロナ禍であるため、マスク、軍手を着用し、終了後に手洗い、うがいを徹底し、感染防止に気をつけて実施した。土木事務所から 50 枚のボランティア袋をいただいたが、50 枚すべて落ち葉になり、公園がきれいになった。

3) ボランティア活動フォローアップの実施

2020 年 11 月 14 日（土）16 時 20 分～17 時 50 分、同朋大学において、今年度のボランティア活動の総括を実施した。

成 果

学生は、環境美化ボランティア活動を通じて、連携機関との協働・連携のあり方を学ぶことができ、福祉実践基礎力は高まった。また、学生の皆さんもすっきりした気持ちになり満足そうで、ちょっとした社会貢献の大切さを学んだ。

4. 「傾聴活動論」

目 的

傾聴に学ぶ。傾聴士とは何かについて理解し、その役割も知る。同朋大学認定「傾聴士」の資格取得に向けて、その理論と実践のあり方について理解する。

内 容・実 績

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で、遠隔と対面を組み合わせ実施された。

この取り組みは、福祉実践基礎力の中でも、傾聴力を高めるものであった。学生は、ボランティア論、人間関係論、コミュニケーション論の基礎理論の学びとそれに関する演習を通じて、傾聴の技能を身につけた。なお、基礎理論は遠隔講義で、演習は対面で大学において実施した。なお、毎年、いなべ市社会福祉協議会に登録して傾聴実践活動をしていらっしゃる実践者をお招きしての特別講義は中止した。

1) 受講学生 6 名

2) 実施日時

2020 年 5 月 13 日（水）から 2020 年 7 月 29 日（水）までの水曜日 1 限（9 時～10 時 30 分）12 回実施した。なお、2020 年 5 月 13 日から 6 月 24

日までは遠隔授業、それ以降は対面授業を実施した。

成 果

学生は、講義においてボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論の基礎理論の学びとそれに関する演習を通じて、傾聴技能を身につけることができた。

5. 「その他（実務家を招聘する科目）」

目 的

主に3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習 ・ ・ ・ 、子ども学専攻：総合演習 ・ ・ ・ ）において、ゼミ担当者がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘する。そしてスムーズな就業につなげるための一助とする。

内 容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等の第一線で働いている実務家に就業動機、職務内容などの講義を拝聴するとともに、学生が実務家とコミュニケーションを図ることにより、ゼミの学習内容を深める。

実 績

2020年5月11日から2021年1月19日にまでの講義期間の主に水曜日の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、1名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

子ども学専攻の3年一部ゼミ内において、わらべうたと言葉の関連性について専門知識を深めるため、日本の民族音楽の専門家を招いた。わらべうたを歌ってみて地方を推測したり、うたのある地方の祭りや行事の動画から日本の伝承文化にも触れた。また、能の謡曲や三味線の端唄は講師の生の声と生の演奏だったので説得力があった。さらに、南インド音楽と比較することで、日本の民族音楽が言葉と切っても切れない関係にあり、わらべうたも同様であるとしみじみ学べた。

成 果

3・4年生の専門ゼミにおいて、ゼミ担当教員がゼミの学びの質をより以上に深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘し、講義を拝聴することによって福祉実践基礎力ひいては福祉実践力が高まった。

・ 同朋大学社会福祉学部福祉実践基礎力と アクティブラーニングについて

目 的

同朋大学社会福祉学部では、豊かな教養を培って人間と社会に関する心理を探求し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っている。そこで、通商産業省が提唱した社会人基礎力をもとに、平成24年度より社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案し、毎年測定して教育に反映させるよう努めている。また、教育効果を高めるために、教科内容に合わせてアクティブラーニングの手法も取り入れるようにしている。

内 容

本学部の目指す人材を育成するために、初期段階としては基礎学力や専門知識などの育成を図っていて、さらに福祉実践基礎力を目標にして教員や学生を測定しながら育成を進めている。この福祉実践基礎力は、「心が動く力（主体性、協働性、目的性）」、「じっくり考える力（課題分析力、計画力、気づき力）」と、「共に生きる力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力）」の3つの能力から構成されている。前者2つは個人的能力で、最後のものは社会的能力になる。

この福祉実践基礎力を測定するために、学生用には「同朋大学福祉実践基礎力診断票」をMicrosoft Formsで作成し、年度末に1～4年生の学生にweb経由で入力して集計している。また、教員には福祉実践基礎力

とアクティブラーニング実施状況のアンケート用紙を配布して記入してもらい、集計した。

実績

福祉実践基礎力は、社会福祉学部学生に必要な能力を表す一つの指標として考えられたものであるが、各学年とも2016年度は一旦下がったものの、2017年度や2019年度は急に高くなっている。もちろん数値が上下することはあるが、だんだん高い値で安定してきていて、いままでの取り組みが学生たちに持続的なインセンティブを与えてきたからだと推察される。ただし、2020年度は、新型コロナウイルス流行による遠隔授業の対応などで、1年生の「心が動く力」があまり高くならなかった。

■福祉実践基礎力の学年別平均点の推移(2015～2020年度)

	心が動く力						じっくり考える力						共に生きる力					
	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
1年生	3.90	3.47	4.08	3.79	4.01	3.87	3.64	3.24	3.79	3.67	3.79	3.82	3.62	3.30	3.80	3.68	3.79	3.77
2年生	4.02	3.37	3.98	3.69	3.85	3.74	3.58	3.25	3.67	3.40	3.58	3.67	3.67	3.22	3.72	3.61	3.71	3.80
3年生	4.23	3.21	3.96	3.71	3.90	4.14	4.04	3.05	3.63	3.51	3.62	3.85	4.06	3.08	3.72	3.60	3.68	3.81
4年生	3.88	3.59	4.13	3.74	4.07	3.86	3.57	3.27	3.82	3.50	3.67	3.53	3.69	3.43	3.90	3.90	3.91	3.79

(注)数値の範囲は1～5で、5に近いほうが各々の力は強い。

次に、福祉実践基礎力と専任教員の育成したい資質との関係性をみる。教員の育成したい資質に係る深い能力は、「じっくり考える力」、「共に生きる力」、「心が動く力」の順になる。そして、下表の能力要素でみると、教員は、「課題分析力」と「柔軟性」を最も育成したく、次に「傾聴力」や主体性」「目的性」「計画力」を育成しようと考えている。

■教員が育成したい学生の資質(能力要素)

能力要素	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力					
	主体性	協働性	目的性	課題分析力	計画力	気づき力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス把握力
よく当てはまる	14	12	14	16	10	14	10	15	16	9	4	8
どちらかというと当てはまる	6	9	7	4	10	7	11	8	7	12	15	13
どちらでもない	2	1	1	2	2	2	2	0	0	1	4	2
ほとんど当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全く当てはまらない	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

最後は、教員のアクティブラーニングの実施状況と学生の能動的な学びとをまとめたものが下表になる。学生参加型授業、グループワーク、プレ

目 黒 達 哉

ゼンテーション、振り返りなどを取り入れている教員が多くいる。いずれのアクティブラーニングでも、学生は能動的に学ぶようになっている。特に、グループワークやプレゼンテーション、振り返りを取り入れた授業では、学生が能動的に学ぶようになっている。

■アクティブラーニングの実施状況と能動的学び

	実施教員数	学生が能動的に学ぶようになった				
		よく当てはまる	どちらかという当てはまる	どちらでもない	ほとんど当てはまらない	全く当てはまらない
学生参加型授業	21	9	12	0	0	0
共同学習を取り入れた授業	19	10	8	1	0	0
PBL（課題解決型学習）	13	7	5	1	0	0
PBL（プロジェクト型授業）	15	8	6	1	0	0
グループワーク	22	14	8	0	0	0
ディベート・討議	13	3	8	2	0	0
フィールドワーク	4	4	0	0	0	0
プレゼンテーション	23	13	10	0	0	0
振り返り	23	12	10	1	0	0

成 果

福祉実践基礎力を考案したことは、学生や教員に具体的な学びや育成の方向性を与えてきた。そして、具体的な能力や要素を掲げることによって、学生や教員の目指す教育内容を、人材育成という側面からわかりやすく理解できたと思う。この方向性と教育方法が絡み合って、学生たちのインセンティブが向上しているようである。

お わ り に

同朋大学社会福祉学部では、平成 22 年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学生の就業力育成支援事業」に応募し、「持続可能な福祉実践力を高める取り組み」というテーマで採択された。引き続き平成 24 年度から平成 26 年度においては「産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業」に採択され、中部地区 23 大学の参加校として、東海 B チームに所属し、「アクティブラーニングの活用」、「地域連携事業」を推進し、福祉実践基礎力、福祉実践力の向上を目指して事業を推進してきた。その後、中部圏教育改革ネットワークの一員として参加校との連携を継続している。

中部圏教育改革ネットワーク

平成 27 年度からは大学において自己資金を投入し、「同朋大学社会福祉学部 大学教育改革推進事業」として 6 年間事業を継続してきた。現在は、社会福祉学部の教育活動に一環として位置づけられるようになったといっても過言ではない。大学関係者のご理解とご協力に感謝の意を表したい。

なお、来年度に向けて、コロナ禍での遠隔対応も考慮に入れながら、O・B・OG にもご協力いただきながら、この事業を進めてまいりたいと考えている。

注記

- 1) アクティブラーニングとは、授業者が一方向的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習や PBL (Problem-Based Learning/Project-Based Learning) など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

- 1) 平成 24 年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
- 2) 同朋大学社会福祉学部 2020 年度大学教育改革推進事業 同朋大学社会福祉学部教育プログラムの概要、2020.
- 3) 同朋大学社会福祉学会 S 学会ジャーナル Vol.21, 2020.

参考文献

- 1) 和木康光『同朋和敬 同朋大学のあゆみ』中部経済新聞社、2002.
- 2) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008.
- 3) 角方正幸・松村直樹・平田史昭（共著）『就業力育成論 実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版、2010.

謝辞

この実践報告をまとめるにあたり、中部圏ネットワーク委員会（旧 産業界ニーズ委員会）の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、事務部の職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

（本学社会福祉学部教授：傾聴活動論、臨床心理学）